

## 第四十節の秘められた歴史 — 第二十四番

### エゼキエル第5番

Jeff Pippenger

2026-08-10

ここ数回にわたって考察してきた『テストimoniーズ』第5巻の一節において、私たちは、エゼキエル、イザヤ、そしてヨハネに与えられた神殿の幻について知らされている。

「これらの教訓は、私たちの益のためである。私たちは神に対する信仰を堅く保たなければならない。というのは、今まさに私たちの前には、人の魂を試みる時が迫っているからである。キリストはオリーブ山において、御自身の再臨に先立って起こるべき恐るべきさばきを語られた。『また、戦争と戦争のうわさを聞くであろう。』『民は民に、国は国に敵対して立ち上がり、また、あちこちに飢饉と疫病と地震が起こるであろう。これらはすべて産みの苦しみの初めである。』これらの預言は、エルサレムの滅亡において部分的な成就を見たが、より直接的には終わりの日に適用されるのである。」

### アブの九日

ティシャ・ベアヴは、ヘブライ語で「アヴの九日」を意味し、紀元前586年にバビロニア人によって第一神殿が、また70年にティトゥスによって第二神殿が破壊されたことを記念するユダヤの記念日である。これら二つの破壊はいずれも同じ暦日に起こった——すなわち、ヘブライ暦アヴの月の九日（通常、グレゴリオ暦では7月または8月に当たる）である。シスター・ホワイトが、エルサレムの滅亡を終わりの日における「人の魂を試みる時」と結び付けるとき、彼女は、いずれも間もなく到来する日曜法を例証する二つの滅亡を指し示しているのである。

ダニエル書十一章十六節はその日曜法を表しており、四十一節と一致している。エゼキエル書においては、エルサレムの滅びが、日曜法の時における賢いおとめと愚かなおとめの分離を例示するために用いられている。エゼキエルはバビロンの捕囚であったが、八章から十一章において、まさにその分離を目撃するために奇跡的にエルサレムへと移された。

第六年の第六月の五日、私が家に座しており、ユダの長老たちが私の前に座していたとき、そこで主なる神の御手が私の上に臨んだ。そこで私が見ると、見よ、火のような姿があった。その腰のように見える所から下は火であり、その腰から上は輝きのように見え、琥珀のような光沢を帯びていた。するとその方は手の形を差し伸べ、私の頭の髪の一房をつかまれた。そして霊が私を地と天との間に引き上げ、神の幻のうちにエルサレムへと連れて行き、北に向かう内門の入口に至らせた。そこには、ねたみを引き起こす、ねたみの偶像の座があった。エゼキエル 8:1-3。

第八章から第十一章までの四つの章は分離の描写であり、またシスター・ホワイトはエゼキエル書第九章に注解するにあたり、それが黙示録第七章と同じ印する働きであることを明示するだけでなく、エルサレムが終わりの時代におけるラオデキヤのセブンスデ

一・アドベンチスト教会を表していることを明らかにしている。

自らの霊的衰退を悲しまず、また他者の罪を嘆かない者たちの群れは、神の印を受けないまま取り残される。主は、その手に殺戮の武器を持つ御使いたち、すなわち御自身の使者たちに命じられる。『彼の後について町の中を行き巡り、撃て。あなたがたの目は惜しんではない。あわれんではない。老人も若者も、処女も幼子も女たちも、ことごとく殺せ。しかし、しるしのある者にはだれにも近づいてはならない。そして、わたしの聖所から始めよ。』こうして彼らは、神殿の前にいた長老たちから始めた。

ここにおいて、教会——主の聖所——が神の御怒りの打撃を最初に受けたことが示されている。年老いた者たち、すなわち神から大いなる光を与えられ、民の霊的利益の守護者として立っていた者たちは、その委託された責務を裏切った。彼らは、かつての日々のような奇跡や神の力の著しい顕現を、もはや期待する必要はないという立場を取った。時代は変わったのである。これらの言葉は彼らの不信仰を強め、彼らはこう言うのである。「主は善を行うこともなく、また悪を行うこともない。」主はあまりにも憐れみ深いので、その民をさばきによって罰することはなさらない、と。かくして、「平和だ、安全だ」という叫びが、もはや再びラッパのように声を上げて、神の民にその咎を、ヤコブの家にその罪を示すことのない人々から発せられるのである。吠えることをしないこの口のきけない犬どもこそ、憤られた神の正しい報復を受ける者たちである。男も、若い女も、幼い子どもたちも、みな共に滅びるのである。

「忠実な者たちが嘆き悲しみ、叫び求めていたその忌むべきことがらは、限られた人間の目に discern し得るすべてであった。しかし、はるかに最も重い罪、すなわち純潔にして聖なる神のねたみを引き起こした罪は、明らかにされてはいなかった。心を探り究められる偉大なお方は、不法を行う者たちがひそかに犯すすべての罪を知っておられる。これらの者たちは、その欺きのうちに安んじるようになり、主の忍耐のゆえに、主は見ておられないと言い、それどころか、あたかも主が地を捨てられたかのように振る舞う。しかし主は、彼らの偽善を暴き、彼らが細心の注意を払って隠していたその罪を、他の者たちの前に明るみに出されるのである。」

「地位、尊厳、あるいは世俗的知恵におけるいかなる優越も、また神聖な職務におけるいかなる地位も、人がその欺く心に委ねられるとき、彼らを原則の犠牲を払うことから守ることはできない。尊ばれ、義なる者と見なされてきた人々が、背教の首謀者であること、また無関心と神の憐れみの濫用における実例であることが明らかになる。彼らの邪悪な歩みを、主はもはや容認されない。そして御怒りのうちに、主は彼らを容赦なく取り扱われる。」

「主は、大いなる光を授けられ、また他者に仕える働きにおいて御言葉の力を体験した者たちから、その臨在を取り去られるときでさえ、惜しみつつうなさるのである。彼らはかつて主の忠実なしもべであり、主の臨在と導きという恵みを受けていた。だが、彼らは主から離れ、他の者たちを誤りへと導いた。それゆえ、彼らは神の不興の下に置かれるのである。」『教会へのあかし』第5巻、211、212頁。

エゼキエル書全体は、エルサレムの滅亡という文脈の中に置かれている。エゼキエルの証言においては、一年半にわたって続いたネブカドネザルの包囲が特に明示されているが

、マタイ二十四章におけるイエスの警告の「より直接的な適用」は終わりの日にある。エゼキエル書において、その真理の筋道は第二十四章に見いだされる。

紀元前588年1月15日

また第九年の十月十日に、主の言葉がわたしに臨んで言われた。「人の子よ、この日、まさにこの日の名を書き記せ。バビロンの王は、まさにこの日にエルサレムに向かって陣を敷いた。」エゼキエル24:1, 2

この日付には、他の聖書的証言によっても確認されているとおり、十八か月に及ぶ包囲が始まった。その日、エゼキエルに臨んだ主の言葉は、大いなる火に続いて煮え立つ鍋によって描かれる血の町のたとえであった。そのたとえは明らかにエルサレムに下るさばきを表しており、同じ章においてさらに、ついには聖所を滅ぼすことになるその包囲がすでに始まったことのしるしとして、エゼキエルの妻が突然の打撃によって死に、そのまま葬られることが続けて記されている。

また主の言葉が私に臨んで言われた。人の子よ、見よ、わたしは一撃をもって、あなたの目の慕うものをあなたから取り去る。しかし、あなたは嘆いてはならない。泣いてはならない。涙を流してはならない。声をあげて泣くことを控えよ。死者のために喪に服してはならない。頭の飾りを身につけ、足にくつをはき、口ひげをおおってはならない。また、人々の差し出すパンを食べてはならない。そこで私は朝、人々に語った。すると夕方、私の妻は死んだ。そして翌朝、私は命じられたとおりに行った。エゼキエル24:15-18。

そのとき、エゼキエルの周囲の人々は、そのたとえと彼の妻の死の意味を尋ねた。

すると民はわたしに言った、「あなたがこのようにするのは、わたしたちにとってこれらのことが何であるのか、告げてくださらないのか。」そこでわたしは彼らに答えた。「主の言葉がわたしに臨んで、こう言われた。イスラエル家に告げよ。主なる神はこう仰せられる。見よ、わたしはわたしの聖所、あなたがたの力の栄え、あなたがたの目の慕うもの、あなたがたの魂の惜しむものを汚す。あなたがたが残してきたあなたがたの息子たち、娘たちは、剣に倒れる。」エゼキエル24:19-21。

この箇所において、エゼキエルの妻と聖所とは、いずれも「あなたの目の喜び」として示されている。聖書史家たちは、その包囲が十八か月続いたと見ているが、これに対してケスティウスおよびティトゥスの包囲は、西暦六十六年から七十年に至るまで四年間続いた。ケスティウスによる最初の包囲から滅亡に至るまでの期間を厳密に数えれば三年半であるが、聖書において最もしばしば用いられる数え方である「包括的計算法」を適用するならば、それは四年となる。両方の計算法が有効であることを知るなら、私たちは、ケスティウスからティトゥスに至るまでの三年半を見ると同時に、四年を見ることもできる。

エルサレムの二度の滅亡において、私たちは日曜法についての二つの証人を有しており、両方の歴史の詳細は、まもなく到来する日曜法——そこでラオデキヤが主の口から吐き出される——に適用されるべきである。ネブカドネザルによる包囲の始まりは、エゼキエルの妻の死によってしるしづけられている。彼女の死に際して、エゼキエルは公然と嘆

き悲しんではないと命じられた。彼が、ユダヤ人が捕囚へと引いて行かれることのしるしであったからである。

66年から70年に至る四年間の期間の始まりは、荒廃をもたらす憎むべきもののしるしによって画されており、それはエルサレムにいたキリスト者たちが逃れるためのしるしであった。

だから、預言者ダニエルによって語られた荒らす憎むべきものが聖なる場所に立つのを見たならば、（読む者は悟れ。）そのとき、ユダヤに在る者たちは山へ逃げよ。マタイ 24:15, 16.

互いに明確に対応し合う二つの包囲があり、そのいずれの包囲にも、包囲の初めに「しるし」が含まれている。エゼキエルは、自分の妻の死と、それに対して自分が嘆かなかったことの意味を説明したとき、こう説明し、その後こう記した。

このように、エゼキエルはあなたがたへのしるしとなる。彼がしたすべてのことにしたがって、あなたがたも行うようになる。そして、このことが起こるとき、あなたがたは、わたしが主なる神であることを知るようになる。エゼキエル24:24.

エゼキエルの妻の死のしるしは、まもなく到来するエルサレムと神殿の滅び、そしてそれに続くバビロン捕囚を示す同定であった。ダニエルによって語られた荒らす憎むべきもののしるしは、その滅びから逃れるための警告であったが、両方の包囲には、その始まりに一つのしるしがある。

まもなく到来する日曜法の前に、預言的包囲があるであろう。そして、エゼキエルの妻の死は、ラオディキアのセブンスデー・アドベンチスト教会が完全に見過ごされたことの象徴である。一方、エゼキエルは十四万四千人の象徴であり、また、その包囲の初めに掲げられる旗の象徴でもある。エゼキエルは、バビロン包囲の初めにおける十四万四千人の旗であり、初めにおける荒廃をもたらす憎むべきもののしるしは、ローマの「しるし」である。一方のしるしは内的警告を語り、他方は外的警告を語る。西暦66年にキリスト者たちに対する警告が確かにあったが、その警告のしるしはローマであった。バビロンの滅亡におけるしるしは、エゼキエルの妻であった。ローマは獣の刻印を受ける階級であり、エゼキエルは神の印を受ける者たちのしるしである。

## 二つの終結期間

最初の包囲は十八か月続き、第二の包囲は四年間続いた。これら両方の包囲は、終わりの日においてその「より直接的」な成就を見るのであり、また両方の包囲は、黙示録九章十五節に記されている三百九十一年と十五日の預言と直接結び付いている。

黙示録九章十節の五か月の始まりには、三十八年の期間を画する歴史が含まれており、それは三十八という数に結びつく四年間の包囲をもって頂点に達し、イスラムの興起を示した。その四年間の包囲は、（五か月に当たる）百五十年が終結し、三百九十一年十五日が始まった時に始まる歴史の中に、その対応物を見いだす。それは一四四九年七月二十七日に始まり、四年後、イスラムはコンスタンティノープルに対して五十五日に及ぶ包囲をもたらした。それは一四五三年五月二十九日に終結した。

1449年7月27日に始まった時の預言が1844年8月11日に終結したとき、1840年から1844年に至る第一天使および第二天使の運動の四年間は、1333年から1337年に至る四年間の包囲、また1449年から1453年に至る四年間とも一致していた。これら三つの証人は、いずれも同じ預言の線に直接属しており、1840年から1844年に至る第一天使および第二天使の運動が、第三天使の運動の歴史において反復される象徴的な四年間を表している。これら三つの証人は、十四万四千人の歴史における四年間の包囲を予表している。その四年間は、66年および70年におけるエルサレムの包囲によっても例証されている。

66年におけるケスティウスによる四年間の包囲の開始と、続いて70年におけるティトウスによるその終結とは、その四年間の期間に対してアルファの象徴とオメガの象徴を成している。同じその期間はまた三年半としても表されており、それはひいては、教皇制ローマが聖所を踏みにじった三年半の預言的年数と符合する。

しかし、宮の外の庭はそのままにしておき、これを測ってはならない。それは異邦人に与えられているからである。彼らは聖なる都を四十二か月の間、踏みにじるであろう。わたしはわたしのふたりの証人に力を与える。彼らは荒布をまとって、千二百六十日の間、預言するであろう。黙示録 11:2, 3

彼らは剣の刃に倒れ、すべての国々へ捕らえ移されるであろう。そしてエルサレムは、異邦人の時が満ちるまで、異邦人に踏みにじられるであろう。ルカ 21:24.

私が、ケスティウスのアルファの象徴からティトウスのオメガの象徴に至る期間に対して、「包括的」計算と「排他的」計算の両方を用いていることに留意することが肝要である。これは、一つの歴史のうちに二つの時間的適用が表されていることを示している。私たちはすでに、この聖書的原則を、イエスがカイサリア・ピリピ（パニウム）を訪れた時から変貌の山へ行かれた時までの期間を考察した際に（はるか以前の複数の記事において）取り扱っている。二人の聖書記者は六日と記し、もう一人は八日と記している。

六日の後、イエスはペテロ、ヤコブ、およびその兄弟ヨハネを伴い、彼らだけを高い山に連れて行かれた。マタイ 17:1.

六日の後、イエスはペテロ、ヤコブ、ヨハネを連れて、人里離れた高い山に、彼らだけを伴って登られた。そして彼らの前で御姿が変わられた。マルコ 9:2.

これらのことを話されてから八日ほどして、イエスはペテロ、ヨハネ、ヤコブを伴い、祈るために山に登られた。ルカ 9:28.

エルサレムの滅亡は、終わりの日に対して「より直接的な」適用を有しており、その滅亡はバビロンとローマによって表される二人の証人である。この二人の証人は互いに一致しているが、真理を増幅するために、それぞれ異なる不可欠な預言的特質を提供している。ローマによる包囲（66年から70年）は四年間であったが、それはまた三年半をも表している。この三年半は、異教主義と教皇制の双方によって成し遂げられた聖所と軍勢の踏みにじりと結びついている。教皇制による踏みにじりは、ローマによる包囲における文字通りの三年半によって予表されたように、象徴的な三年半の期間であった。

その四年間の包囲はまた、イスラムの高揚、そしてその後の第一、第二、さらに第三天使の運動の高揚を特定する預言的系統線に結び付けられている四年の期間とも関連して

いる。ケスティウスからティトゥスに至る期間は、教皇制ローマの輪とも、またイスラムの輪とも交差している。ローマの輪と、ケスティウスおよびティトゥスの三年半は、教皇制ローマの象徴的な三年半と交差しており、それによって異教ローマと教皇制ローマという二つの存在を特定している。イスラムの輪は、同じ歴史によって四年として理解されるものと結び付けられているが、その歴史におけるローマの輪と同様に、イスラムはイスラムの輪に従属する第二の勢力、すなわちアドベンチズムと結び付けられている。三年半の期間はその両段階におけるローマを表し、四年の期間はイスラムとアドベンチズムを表す。異教ローマと教皇制ローマは預言的に切り離すことができず、イスラムとアドベンチズムもまた同様である。

このことは預言的に、バビロンの包囲を考察する際、十八か月の包囲という例証の中に二つの時間の理解が見いだされるべきことを要求している。ローマによってもたらされた包囲における二つの時間の表象は、預言的に、ネブカドネザルによってもたらされた包囲においても二つの時間の表象を要求する。ネブカドネザルの十八か月にわたる包囲もまた、一年半の象徴として理解することができる。十八か月は一年半であり、一年半は1.5年と表すことができる。ネブカドネザルの包囲は、十八か月であると同時に、一・五（1.5）年でもあった。

十八か月はエルサレムを踏みにじることになる勢力を指し、一・五年はイスラムを指す。十八か月を特定する預言的計算の輪はバビロンを指し示し、他の預言的計算の輪はイスラムを指し示す。イスラムとの関連において一・五年の適用にどのように到達するのかについては、まだ説明を提示していないが、ローマに結びついた破壊にも二つの時の計算があることに留意すべきである。すなわち、一つはローマの預言的計算の輪（異教ローマと教皇制ローマの双方）に結びついたものであり、もう一つはイスラムの預言的計算の輪に結びついたものである。これらの特徴は、エルサレムのアルファとオメガの両方の破壊に見いだされる。

ケスティウスおよびティトゥスによる四年間にわたるエルサレム包囲は、三十八年の期間をもって始まり、その終結がイスラムの掲揚を象徴する四年間の包囲で締めくくられた一つの預言的系譜の終わりを表しており、そしてまさにその同じ系譜における最後の四年間の期間は、十四万四千人の旗の掲揚を表している。

これらの事柄については、次の記事で引き続き扱うことにします。